

Conermann, Stephan & Anja Pisor-Hatam 編
Die Mamlūken : Studien zu ihrer Geschichte und Kultur.
Zum Gedenken an Ulrich Haarmann
(1942–1999), Schenefeld, 2003

伊藤隆郎

マムルーク朝の研究は、特にここ10数年大きな進展を見せた。1997年に創刊された年刊の専門誌 *Mamluk Studies Review* (昨年には2冊刊行され、今年もその予定のようである) だけでも平均して毎回10本近い論文と15本前後の書評が掲載される。また、研究者が世界各地で輩出していることも目を引く。

ここに取り上げる書は、その副題にある通り、マムルーク朝研究の第一人者で、ドイツの中東研究をリードしてきた Ulrich Haarmann に捧げられた追悼論文集である。前書きに、序論的なレビュー論文を含め14編の論文が続く。すべてがマムルーク朝研究に関するものではないが、同研究がドイツ語圏でも最近活気づいてきていることを示している。以下、各論文の概要を若干の感想とともに紹介していきたい。

① Stephan Conermann: *Es boomt! Die Mamlūkenforschung (1992–2002)* [pp. 1–69] は、表題の時期に発表された研究成果を、史料研究、政治、経済、社会史など14のテーマに分けて紹介、論評しながら、この間のマムルーク朝研究の動向と問題点を整理する。その際、本書に収録された各論文の抜粋が、囲み記事の形で関連するテーマのところには挿入されており、これによって、専門外の読者にも、それらの論文がいかなる研究状況の中で書かれたかを理解しやすいように工夫されている。

重要な論点を数多く指摘するが、このレビューが有用なのは何よりも豊富な文献情報を含む点においてである。とはいえ言及されていない文献もある。もとより一個人がすべてを網羅することは不可能に近く、Conermannも自身が重要と判断した文献のみを取り上げたこと断っている。しかし、それでもなお触れられるべきであったと思われるものがある。いくつか挙げておく。

史料校訂ではまず、*Hiṭaṭ* の新校訂 Sayyid 2002。これまでにブーラク版の第2巻前半までに相当する3巻が出版された。al-Droubi 1992 は、表題の史料の校訂本と英語による注・解題篇から成る。同史料の刊本に古くはカイロ版があるが、入手は容易でない。また校訂者はカイロ版が依拠した写本のほかにも複数の写本を参照している。その他、この間に最終巻が出版された史料2点 (Ḥabaṣī 1994; Ḥabaṣī 1998)。

文書では、al-Harithy 2001。この大部なワクフ文書の謄本は、既にその一部が原文書の一部とともに校訂されているが [Amin 1986]、これによって全文を見られるようになった。ただし、謄本にある欄外の注記のいくつかが不適当な箇所に挿入されているなど、十分な校訂作業がなされたものとは言えず、利用には注意を要する（同書については別に書評を準備中である）。しかし、文書史料の閲覧や複写が困難であることを思えば、この書の裨益するところは大きい。

アラビア語による成果では、アナール派的観点から表題のテーマ（シリアにおける気候、物価、病）を分析した力作 Tawā 1998。また、文書史料に基づいた堅実な研究である 2 論文 (Ismā'il 1998; Abū Ġāzī 2000)。このうち前者は、オスマン朝期の文書を利用している。今後はこうした後代の史料の活用も考えなくてはならないであろう。

② Thomas Bauer: *Literarische Anthologien der Mamlukenzeit [71–122]* は、アラブ文学の専門家による論考である。彼によれば、マムルーク朝期のアンソロジーは少なくとも 51 人の著者・編者による 93 点があり、またそれらが当時の文学的・文化的生活に持つ意味もかつてないほど大きなものだった。

Bauer はまず、アンソロジーを 4 つのタイプに分類する。第一に、最もありふれたタイプである、主題によるもの。これは、身体の一部、国、恋愛といった事柄をテーマにするものと、文学形式や修辞法などの文学的テーマを扱うものと 2 つに大別され、さらに両者はそれぞれ包括的なテーマを対象とするものと、より限定的なテーマに関するものとに分けられる。第二に、注釈のアンソロジー。これは、ある作品を選び、それに注釈を付ける形を取りながら、関連するテーマを連想的に広く扱う。第三に、作品のアンソロジーで、過去の有名な詩人や自分自身の作品を編纂したものである。第四に、秩序立った原則を持たない寄せ集め (Melange)。

西暦 8 世紀から 11 世紀半ばにかけてアンソロジーは書記たちによって産み出された。一方、マムルーク朝時代のアンソロジーの著者たちはウラマーであった。Bauer によると、この変化はセルジューク朝以降の「スンナ派復興」とともに独自の規範を持ったグループとしての書記層が徐々に解体し、代わってウラマーが彼らの職務や文化活動を担うようになったことによってもたされた。ただし、そのために文学自体が大きく変化することはなかった。ほかに見られる前代との違いは、君主による学芸保護が後退して職業詩人の存在がほぼ不可能になったこと、しかし詩が持つ社会的な意義は増大し、詩を作る人口が拡大したことであるという。

次に Bauer は、3 つのアンソロジーを特に取り上げ、それらから看取されるマムルーク朝時代の文学的・文化的環境の特徴について述べる。要点をまとめれば、1) ウラマーが文学に積極的に関与するようになったことを受けて、作詩そのものより詩文の選集をつくるのが、文人 (adīb) として名を成すための主要な手段となった。そして文人とは、

アンソロジーを通じて、文献学的基礎知識を提供するほか、優れた作品とそれを判断する基準について教える者であると考えられた、2) アンソロジーは、ウラマー間の交流においていわば名刺や抜刷のような役目を果たした。こうしてウラマーは、相互に自分たちの価値観を確認し、グループの同一性を維持した、3) 教育が普及したおかげで、高名なウラマーと文盲の民衆の間に位置する「小ウラマー」もアンソロジーを編んだ。彼らの典型的な作品は、内容的に種々雑多な寄せ集めであり、口語表現が散見される一方、高尚な面も持つ。

続いて Bauer は、アンソロジーとも見なすことのできる作品を含むジャンルとして、百科事典、歴史書、インシャー作品、信心書 (Erbauungsbuch) または娯楽書、論説 (Sachtext) の5つを挙げ、マムルーク朝時代のアンソロジーの多様性を再確認する。そして最後に、多くの作品が未刊であることを指摘し、今後それらの校訂や研究が進められるべきであると提言する。

本論文は、多くの論点を盛り込み過ぎたきらいがあり、繰り返しも多く、全体として多少散漫な印象を与える。また特に、11世紀以降に書記層が解体し、その職務や文化活動をウラマーが肩代わりしたという見解の妥当性は、なお検証される必要があるだろう¹⁾。しかしながら、アンソロジーが文化史・社会史研究にとって重要な史料となる可能性を明らかにした意義は大きい。稿末に付されたアンソロジーのリストも便利である。

③ Stephan Conermann: Ibn Aġās (st. 881/1476) “Ta’riḥ al-Amir Yašbak aḡ-Zāhiri” — Biographie, Autobiographie, Tagebuch oder Chronik? [123–178] は、表題の史料の性格を明らかにする。ドゥルカドゥル君侯 Šāh Suwār 討伐のため、1471年春アミール Yašbak min Maḥdī aḡ-Zāhiri の下に遠征軍が組織され、シリア北方へと派遣された。Ibn Aġā は、これに qāḍī t-askar として同行し、その間の出来事を *Ta’riḥ al-Amir Yašbak aḡ-Zāhiri* に書き残した。

最初に、この史書の献呈先である Yašbak の略歴、書かれた当時のシリア北方、アナトリア東部の状況、著者 Ibn Aġā の略歴が紹介された後、同書の構成が示される。それは大き

1) たしかにマムルーク朝期のウラマーと書記・官僚との境界は明確ではない。しかし、行政・財務に携わるウラマー、逆に司法・教育に関わる書記・官僚はどちらもむしろ少数である [cf. Petry 1981; Martel-Thoumian 1991]。Bauer がウラマーとしている an-Nuwairī や al-Umarī, aḡ-Šafadī や al-Qalqašandī などは経歴からすると書記や官僚といえる。そもそも彼は、ハディース学の素養がある者をみなウラマーと考えているようであるが、これは疑問である。この時代ハディース学が流行し、女性やマムルークの中にもそれを熱心に学ぶ者があった [cf. Berkey 1992: 128–181; 本書所収 Leder 論文]。つまり、アンソロジーの著者のウラマー化は、ひとつには、書記や官僚にもハディース学を修めた者が多くなったことによって説明できるのではないだろうか。いずれにせよ、ウラマーと書記・官僚との関係については、両者の教養のあり方や文筆活動などの点からも、今後さらに詳しく検討されなくてはならない。

く3部に分けられる。第1部では、遠征軍が北上し、アインターブを占領して Šāh Suwār との交渉が始まるまでが記される。第2部は、そこからアク・コンル朝の Uzun Ḥasan の動きを探るためにタブリーズに使節として送られた Ibn Agā の道中記。第3部は、彼が Yašbak の遠征軍に戻って以降、Šāh Suwār が捕らえられ、カイロで処刑されるまでに至る過程について。

このうち第2部が大きな部分を占め、同書の特徴ともなっている。そこで Conermann は、この部分をドイツ語に訳出する。その文体は、見聞した出来事を日を追って淡々と簡潔に叙述するものである。次にこれを踏まえて筆者は、伝記、献呈書、自伝という史料タイプと比較し、*Ta'riḥ al-Amīr Yašbak aḡ-Zāhiri* はそのいずれのジャンルとも形式的または内容的に異なるが、部分的にはそれぞれと共通の性格を有すると説明する。しかし、全体としては同じ頃に多く書かれた日誌 (Journal) に最も近いという。中でも Ibn al-Ġ'ān: *al-Qaul al-mustaḡraf fī safar maulānā al-Malik al-Ašraf* は、ほぼ同種のテキストと見なすことができる。さらに Conermann は、Ġiyāṭaddin Naqqāš の中国旅行記、および 'Abdarazzāq Samarqandī: *Maṭla'ī sa'dain* に含まれる南インド旅行記の2つのペルシア語テキストと *Ta'riḥ al-Amīr Yašbak aḡ-Zāhiri* の第2部との類似性を指摘する。そして、同書はこのように複合的な性格を持ち、ジャンル分けすることが難しいが、あえていえば「文学的な諸慣習によって構成され、派遣報告で増補された遠征記」と名づけられる、と結論する。

ペルシア語文献をも引き合いに出すところは筆者の博覧を示すが、あまり時期にこだわらず、さらに他の旅行記と比較することも可能だったと思われる。それにしても、日誌のような叙述スタイルが15世紀末から16世紀初めにエジプト・シリアでもペルシア語圏でも好まれていたらしいのは、どう理解したらよいのだろうか。マムルーク朝期の歴史書の文体や形式の問題について、例えば Haarmann 1971 や Weintritt 1992 があるが、さらに比較・検討を進めることが、これからのヒストリオグラフィー研究の課題のひとつといえるであろう。

④ Stephan Conermann & Lucian Reinfandt: *Anmerkungen zu einer mamlūkischen waqf-Urkunde aus dem 9./15. Jahrhundert* [179-238] は、さきに Conermann が Suad Saghbini と連名でその写真とともに校訂を発表したワクフ文書 [Conermann & Saghbini 2002] のドイツ語訳と注を主な内容とする。現存するマムルーク朝時代のワクフ文書のほとんどがスルタンかアミールのものであるのに対して、この文書のワクフ設定者がマムルークの子供 (aulād an-nās) である点が注目される。また管見の限り、オリジナルのワクフ文書の全訳が提示されたのはこれがはじめてであり、その意味でも本論文はワクフ研究、ならびに文書研究への重要な貢献である。

評者は当該文書の校訂と写真、訳文を対照してみたが、さしあたり次の6点が本論文で変更ないし訂正されていることに気づいた。1) 校訂で不明とされていた、17行目に現れる

地名を Billaya と訳出²⁾、2) 51 行目に見られる人名が校訂では Ğānim, 訳では Ğānibak となっている。写真では後者が正しいように見える、3) 52 行目の人名のニスバが校訂ではタイプミスされていたが、これを al-Ibrāhīmī と訂正、4) 校訂の 61 行目は誤って 62 行目も含んでいる。後者は、min ḥairin muḥḍaran 以下の部分である³⁾。したがって、これより後、校訂の行番号を 1 つずつ増やす必要があるが、訳では訂正されている、5) 70 行目右側の証人の名前を校訂では ‘Abdalqādir b. ‘Alī aṣ-Ṣairafi, 訳では ‘Abdalhādī b. ‘Alī aṣ-Ṣūfi と読んでいる。どちらとも決し難い、6) 同じ行の左側の人名を校訂では ‘Alī b. 以下不明としているのに対して、訳では ‘Alī b. Aḥmad al-Faiyūmī ではないかと推測している。これらの異同について本論文では何も触れられていないが、せめて校訂の行番号の誤りは注記されるべきであったろう。なお、廟に支給される 200 のもの (31 行目) を校訂では R’WN とし、本論文ではこれを「升 Scheffel」と訳している。写真では “rāwiya” のように見える。訳者たちもそう読んだのだろうか。ここにも注記が欲しい。

解釈に関しては、次の 2 点を指摘しておきたい。第一に、ワクフ収益の 4 分の 1 をワクフ設定者 Yaḥyā の母、祖母、妻 Šīrin, および Güzel と人名不明の者の 5 人で分配するように定められたと本論文は考えている [208]。文書で該当するのは、25 行目の終わりから 27 行目の半ばまでである。26 行目末尾が不明瞭で、27 行目の初めにシミがあることから、ここに人名が書かれていると読んでいるらしい。だが、このシミは大きなものではなく、26 行目末尾の不明瞭な箇所を含めても、1 人分の人名があるようには見えない。とすれば、この 4 分の 1 の受益者は 4 人だったことになる。あるいは、Yaḥyā と Güzel の関係を示す文言がないので、“Güzel” までの部分が、その前の「祖母」を修飾する形容句である可能性もある。この場合は、母、祖母、妻の 3 人が受益者となる。また、いずれにしても、妻 Šīrin を受益者から外して変更した新しい分配比率の表 [222] は間違っている。Yaḥyā の母、祖母、Güzel と人名不明者の 4 人の各取り分は変更なく 5%、全体では 20% とすべきである。第二は、ワクフ財源の土地の割合に関してである。文書の 5 行目から 6 行目にかけて、それが全 24 qīrāt のうち “qīrāt wāḥid wa ṭumn qīrāt wa niṣf wa rub’ sub’ min qīrātain wa niṣf qīrāt” と記されている。問題となるのは、“niṣf wa rub’ sub’ min qīrātain” である。本論文では、これを「 $1/2$ qīrāt + $1/14$ qīrāt」と訳している。しかし、ここで niṣf の後に qīrāt がいないこと、qīrāt が双数となっていることは少々奇妙である。確信はないが、「 $1/2$ qīrāt + $1/28$ qīrāt」ないしは「 $1 + 1/14$ qīrāt」を意味しているのではないだろうか。

ところで、Yaḥyā, その息子、およびこのワクフの nāzīr となった Kumušbugā に関わ

2) Halm 1979–82: 481–482 によれば、Billāya ないし Billāy。また写真では、最初の文字の上 に ḍamma が見える。しかし、位置的には Billāya のことを指すと考えて、おそらく間違いはない。

3) なお校訂では、“muḥḍar” が対格であることを示す alif が抜けている。

る文書、さらにそれらの中に頻繁に登場する4人の人物に関わる文書がほかにいくつもあり、稿末に内容が挙げられている。今後、これらの文書の研究も進められることが望まれる。

⑤ Albrecht Fuess: Dreikampf um die Macht zwischen Osmanen, Mamlūken und Safawiden (1500–1517). Warum blieben die Mamluken auf der Strecke? [239–250] は、16世紀初頭の中東の政治状況を概観し、マムルーク朝が手を拱いていた要因をまとめる。第一に、軍事力の問題。13世紀半ば以降、Timūrの侵攻を除けば、マムルーク朝は大きな対外戦争を経験しなかったこともあって、マムルークたちの軍事能力が落ちていた。また、彼らの反対で火器がほとんど導入されなかった。第二に、海事への関心の低さ。彼らは大規模な艦隊を建造することがなく、海上貿易も他人任せで、経済的に遅れをとった。第三に、経済の悪化によりマムルークの購入が困難になった上、疫病の流行でマムルークの数が減少したこと。第四に、これらの問題をよそに、マムルークたちが内部の派閥抗争に明け暮れていたこと。それによって国力は消耗され、15世紀末にはマムルーク朝の改革能力は枯渇していた。これに対して、オスマン朝、サファヴィー朝は、この時代の新しい状況に柔軟に対応することができた。

マムルーク朝が経済的に遅れをとった要因として、彼らの海事への関心の低さを挙げることには、評者は疑問を感じる。Fuessはオスマン朝との態度の違いを強調するが、17世紀以後に勢力を拡張したヨーロッパの国々に比べれば、オスマン朝もまた、サファヴィー朝やムガル朝と同じく「陸の帝国」だったといえるであろう[羽田2000: 85–86]。海軍力と重商主義的な貿易政策が重要になるのは、マムルーク朝滅亡後のことではないだろうか。それよりも、マムルーク朝後期のスルタンの多くが高齢であったことが抜本的改革に取り組みなかった理由のひとつではなかったかというFuessの指摘の方が注目される。このことが政治や社会に対してどのような影響を及ぼしたのか、今後検討されるべきだと思われる。

⑥ Thomas Herzog: Legitimität durch Erzählung. Ayyūbidische und kalifale Legitimation mamlūkischer Herrschaft in der populären *Sirat Baybars* [251–268] は、語り物文学『バイバルス伝 *Sirat Baibars*』の中で aḡ-Ẓāhir Baibars のスルタン登位がどのように正当化されているかを検討する。物語では、Baibars はムスリムとして生まれたものの兄弟に騙されて奴隷身分に落とされ、その後彼を買い取ったアイユーブ朝スルタン Nağmaddin aṣ-Ṣāliḥ とその妻 Ṣağarat ad-Durr (ないし Ṣağar ad-Durr。実際には妾) によって養子に迎えられたことになっている。そして aṣ-Ṣāliḥ の死後、後継を託されたが、アイユーブ家を優先してそれを拒み、架空の人物も含めて5人がスルタンに就任した。しかし、いずれも支配者に相応しい者ではなく、すぐに死亡、ないし殺害され、ついに洩々ながら Baibars はスルタンになることを承知した。ここでは事実と異なり、Aibak も Quṭuz もアイユーブ家の者であり、また Baibars は Tūrānšāh や Quṭuz の暗殺に関与していなかつ

たとえられる。つまり Baibars は、権力への意志を持っていなかったにもかかわらず、アイユーブ朝の正当な後継者としてスルタンになることが早くから運命づけられていたと強調されるのである。一方、当時カリフによる支配権の承認が大きな意味を持っていた。実際 Baibars は、カイロでアッバース家の者をカリフに擁立している。ところが『バイバルス伝』は、このエピソードに触れない。代わりに、Šağarat ad-Durr がバグダードのアッバース朝最後のカリフ al-Musta'šim の娘となっており、それにより彼女を通じてカリフの支配権が Baibars に伝えられたと暗示されている。要するに『バイバルス伝』は、Baibars の支配を、彼とアイユーブ朝スルタン、およびアッバース朝カリフとの擬制的血縁関係によって正当化し、アイユーブ朝、アッバース朝がともにその歴史的使命を終え、マムルーク朝の成立が歴史の必然であったことを示そうとしているのである。

問題は、このような Baibars 像がいつ頃、どういう政治的・社会的状況の中で産み出されたかであろう。口承文学の成立時期やその過程を明らかにすることは困難だが、この問題に Herzog 2003 が取り組んでいる。本論文とあわせて読むことをお薦めする。ただし、カイロでのカリフ擁立の逸話が『バイバルス伝』に見られないことについては、そこでは取り上げられていない。これらのもとになった博士論文が近く刊行予定のようであり、諸写本の異同の問題についても含め、詳しくはそれを待ちたい。

⑦ Gerhard Hoffmann: Die Einnahme von Amorium/'Ammūriya im Jahre 838 — ein Katalysator frühmamlūkischer Tendenzen im 'abbāsīdischen Militär? [269–287] は、アッバース朝初期の軍事組織の中での軍人奴隸またはマムルークの位置づけについて論じる。838年、カリフ al-Mu'tašim の率いる遠征軍がビザンティン軍からアナトリアのアモリウムを奪った。Hoffmann が考察対象とするのは、その前後の状況である。まず、この戦いでカリフの親衛隊、特にトルコ系軍人奴隸が果たした役割は大きくなかったという。第一に、従軍した 80,000 人の兵士のうち親衛隊は 4,000 人ほどを占めるだけだったと推測されるからである。第二に、決定的だったのは、前哨戦でイラン系の将軍 al-Afšīn が勝利したことであった。第三に、親衛隊とは別に専門の担当者がいたと思われる攻城機具が大きな役割を果たした。また、親衛隊の長に任命されたのが非トルコ系の将軍だったことも指摘される。次に、この戦いの後も「トルコ人」がアッバース朝軍の中核を担ったわけではないという。アモリウム陥落直後に主にアラブ系とホラーサーン系の軍人たちが起こした反乱が失敗したこと、続く al-Afšīn の処刑によって、たしかにトルコ系軍人たちが要職に躍進した。しかし、奴隸軍団は依然として比較的少数に留まり、al-Mu'tašim はさまざまな民族の将軍に遠征軍を委ねたのである。結局、当時の軍事組織上の変化がトルコ系軍人奴隸の増強を伴うものであったとは考えられない。むしろ多様な民族から成る職業軍人集団を登用する政策が継続されたのである。また、その大部分は非アラブ系の傭兵 (murtaziqa) や自由身分の家臣 (šākirīya)、解放奴隸や軍人奴隸から構成されており、それらを明確に区別することはでき

ない⁴⁾。したがって、後の発達した「マムルーク」制度の基本的構造をアッバース朝時代初期、特に al-Mu'taṣim の治世に求めるのは問題であるという。

9世紀アッバース朝の奴隷軍団の性格についてより詳しく検討した清水和裕も、al-Mu'taṣim のトルコ系奴隷軍団をマムルーク制度の原型と見なすことに異議を唱えており [清水 1990; 清水 1999], Hoffmann と見解が一致している。両者の批判の主対象である David Ayalon の説は修正されなくてはならないのであろう。

⑧ Stefan Leder: Postklassisch und vormodern: Beobachtungen zum Kulturwandel in der Mamlūkenzeit [289–312] は、アイユーブ朝時代からマムルーク朝時代にかけての学問と教育についてダマスカスを例に概説する。既に当時の多くの著述家たちにより、学問の制度化に伴う俄学者の増加、ウラマーのモラルの低下といったことが批判されている。しかし、だからといってこの時代を単なる停滞や衰退の時代と理解するべきではなく、制度や社会との関係で学問や教育がどのような変容を蒙ったかを検討する必要があると Leder は提唱する。そして、マドラサをはじめとする教育機関が普及したことによって、文学や学問、とりわけハディース学への広範な社会層の参加、民衆文化・文学の隆盛が見られた一方、エリート層が形成され、アダブ文学や歴史叙述において表現技巧が洗練されたほか、著者たちの個人的観点や考えが前面に押し出されるようになったと指摘する。彼はそれを文化の分化・多様化の進展と呼ぶ。

さきの Bauer 論文の予備的考察として読まれるとよいかもされない。

⑨ Anja Pistor-Hatam: Ursachenforschung und Sinngebung. Die mongolische Eroberung Bagdads in Ibn Ḥaldūn's zyklischem Geschichtsmodell [313–334] は、モンゴルによるバグダード征服が13, 14世紀の歴史家たち、中でも Ibn Ḥaldūn によっていかに記述されたかを検討し、後者の特徴を浮き彫りにする。彼らが、この出来事にどんな意味を持たせ、解釈したかには、大きく3通りある。第一に、主にモンゴル支配下で活動したシーア派の著者たちは、草原から来た騎兵によって篡奪者アッバース朝はその首都を破壊され滅亡するであろう、というアリーに帰せられる予言をもとに、これが神意であったと考える。スンナ派の著者たちにも、当時バグダードを退廃が支配していたために、神が罰を下したのだと見る者がある。第二は、アッバース朝カリフ al-Musta'ṣim にその責任を帰すもので、彼と側近たちの道楽、無能がモンゴルの侵攻を招いたとする。第三に、マムルーク朝治下の歴史家たちの多くは、シーア派の陰謀に原因を求める。バグダードのシーア派地区 al-Karḥ が

4) ただし清水 1999 によれば、šakiriya とトルコ系奴隷軍団は史料上厳密に区別されているという。

カリフの兵士たちによって略奪されたことを怨みに思ったワジール Ibn al-'Alqamī が、モンゴルを裏で手助けし、復讐を遂げたというのである。歴史を循環的なものと見なす Ibn Ḥaldūn は、バグダード陥落が神意によるものとする点で、第一の考え方に近い。ただし彼にあっては、神意とは歴史が永遠に循環するように定めたものという意味である。第二、第三の解釈と Ibn Ḥaldūn のそれとはかなり異なっている。彼によれば、こうしたことは、個人的な要因によってもたらされたのではなく、王朝末期に見られるべき現象である。つまり Ibn Ḥaldūn の歴史哲学は、バグダード陥落を歴史の流れの単なる一齣として説明し、これを一大惨事とする同時代人の受け取り方や伝聞とは矛盾しているのである。そして最後に、おそらくはこのような叙述法のために、Ibn Ḥaldūn はアラブ世界で長らく忘れられていたのではなかったかとの仮説が提示される。

バグダード陥落がどのように伝えられたかというのは興味をそそられるテーマであるが、ここでは Ibn Ḥaldūn が論の中心であるため、残念ながら他の歴史家たちに関する分析が十分になされていない。ほとんど二次文献に依拠しているのも問題である。このテーマについて同時代のアラビア語、ペルシア語史籍をさらに詳しく比較検討してみる価値はあるのではないだろうか。

⑩ Henning Sievert: *Der Kampf um die Macht im Mamlūkenreich des 15. Jahrhunderts* [335–366] は、マムルーク朝後期のスルタン位をめぐる争いを、「派閥」という概念を用いて説明する。主人と擬似親族関係にある一部のマムルークたち——スルタンのマムルークの場合は *ḥāṣṣakīya* —— が主に派閥の核となり、これに主人のクライアントに過ぎない大部分のマムルークやその他弱い関係で結ばれた人々が加わって派閥が形成される。こうして形成された派閥は、勢力拡大のために、次に別の派閥——大抵の場合リーダーの同僚 (*ḥuṣḍās*) が率いた派閥——と同盟する。以上の理論的導入部に続いて、派閥が実際にどのように形成され、機能したのかが2つの事例によって描写される。Mu'aiyad Ṣaiḥの死後、そのマムルークたちの多くを味方につけた *Ṭaṭar* は、さらに彼と同じ *Barqūq* のマムルークたちに支持された *Tanbak* と同盟して派閥に取り込むことにより、成功した。この戦術は後のモデルとなった。またこれによって、前スルタンのマムルークたちが次のスルタンを決める際の発言権を強めることになったが、一方彼らは有力アミールの配下に入ってはじめてその力を発揮することができた。これに対して、*Ġaḳmaq* の息子 *'Uṭmān* が支配を引き継ごうとする試みは失敗に終わった。それは、*Ġaḳmaq* の築いた権力バランスが彼の死によって崩れ、*'Uṭmān* の派閥がほとんど父のマムルークたちだけから成っていたからである。

本論文は新味には乏しいと言わざるを得ないが、スルタン交替時の複雑な諸派閥の動きを、限られた時期にせよ、整理して示した点に意義を認められるであろう。

⑪ Peter Thorau: Einige kritische Bemerkungen zum sogenannten “mamlūk phenomenon” [367–378] は、Baibars と Qalāwūn の治世をマムルーク朝の支配体制の確立期、an-Nāṣir Muḥammad の第三治世を全盛期とし、その後を衰退期とする通説への批判。まず、Tūrānšāh の暗殺された 1250 年から Baibars がスルタンになる 1260 年までの期間、マムルークたちは派閥に分かれて互いに争い、市中を荒らしたが、これはマムルーク朝後期にも見られたことである。次に、それ以後 Qalāwūn の息子 Ḥalīl の治世に至る時期 (1260–93 年)、つまり古典期には、十字軍やモンゴルという外敵の脅威があり、スルタンは優れた軍事指導者でなければならず、Baibars の息子 Baraka のようにその能力のない者は廃位された。これも 14、15 世紀の無能な傀儡スルタンの場合と似ている。一方古典期には、外敵に対抗するため諸派閥が協力する必要があった。また、スルタンはマムルークたちの攻撃性を外に向け、彼らに戦利品を得る機会を与えることができた。さらに、対外戦争に備えてマムルークたちは厳しい訓練と規律の下に置かれた。こうして Baibars や Qalāwūn はマムルークたちを掌握し、その横暴を押さえられた。このことが、彼らの時代が積極的に評価される大きな要因と考えられる。続く an-Nāṣir Muḥammad の第三治世にはこのような外的脅威がなく、Amalia Levanoni が論じたように、繁栄の蔭で軍事規律の弛緩、情実政治や搾取の横行などが見られた。要するに Thorau は、一般に後期の没落現象と言われていることは、マムルーク朝の支配体制にそもそも内在する特徴、常態なのであり、1260–93 年という時期を逆に例外と見なすべきであるという。

専ら軍事・政治史的観点からなされた粗い議論ではあり、またこのような立場からすると、マムルーク朝史は結局何の変化もない時代としてしか描けないのではないかという疑問も湧く。しかしながら、Thorau が主張するように、マムルーク朝史全体の中に各スルタンの治世を位置づけ、その評価 (同時代のものも含めて) について今後も問い直していくことは必要だろう。

⑫ Rudolf Veselý: Das *Taqriḏ* in der arabischen Literatur [379–385] は、*taqriḏ* の史料的价值を再認識させる論文。*taqriḏ* については、これを “blurb” と訳して紹介した先駆的な論文 Rosenthal 1981 がある (この論文については、岩武 1994 も参照のこと)。これを踏まえ、Veselý は Ibn Ḥiḡga: *Qahwat al-inṣā'* および Ibn Nāhiḏ: *Sira Ṣaihiya* に付された 59 の *taqriḏ* (その中には Rosenthal が分析した 11 例も含まれる) を検討し、*taqriḏ* の性格や *taqriḏ* 研究から得られる知見に関して次のように述べる。1) *taqriḏ* は大体対象とする作品への賛辞であるが、al-'Aini による Mu'aiyad Ṣaiḥ の頌詩に対し、Ibn Ḥiḡga と al-Baṣṭakī が Ibn Ḥaḡar al-'Asqalāni の慫慂を受けて *taqriḏ* 形式の批評を書いた例がある、2) 著者自らが、時には友人を伴って、自作への *taqriḏ* 執筆を他に依頼した。その依頼は基本的に口頭でなされたが、書面で行われることもあった。Ibn Nāhiḏ がそのために書いた韻文が残されている、3) 一度出来上がった作品を識者に見せた後、改訂したこと、つま

り執筆過程が taqrīz からわかることがある、4) 自分よりも上の実力者にまず taqrīz を書いてもらうよう依頼者に薦め、評価が定まってから引き受けた場合もあり、このように taqrīz 執筆者同士の間関係が読み取れる。さらに Veselý は、写本カタログをも参考にして、現存する taqrīz がほぼ 14 世紀の 90 年代以降のものであること⁵⁾、1 編の詩やその一部に対する taqrīz もあったことを指摘する。そして、taqrīz とは形式的にも内容的にも現代の書評のようなものであり、当時の審美観や規範、文学的議論のテーマ、またその議論がどのように行われていたかについて教える史料であると結論する。

惜しむらくは、taqrīz の執筆者たちについて具体的にほとんど明らかにされていない点である。Veselý は、taqrīz の執筆を依頼されたのは既に名声を得た文学者や学識者であったと述べるが、Rosenthal によれば Ibn Ḥaġar al-'Asqalāni は taqrīz を書くことで学界デビューしたのではないかという。後者は例外的なケースなのであろうか。付言すれば、Rosenthal 論文が taqrīz を分析した「最初で、これまでで唯一の」研究というわけではない。Rašīdaddīn Faḍlallāh al-Hamadāni の神学著作に付された taqrīz について van Ess 1981 がある（その書評である岩武 1994 も参照されたい）。

⑬ Otfried Weintritt: *Ta'riḥ 'Abd al-Qādir: Autobiography as Historiography in an Early 17th Century Chronicle from Syria [387-401]* は、オスマン朝期のシリアで書かれた史書に関するもの。その著者 'Abdalqādir b. Aḥmad は、ダマスクスのカーディリーヤ教団のシャイフの子として 1585 年に生まれ、1596 年父の死後シャイフの位を引き継ぎ、1651 年に没した。彼は、その地位と父の名声ゆえに、オスマン朝高官とダマスクスの名士との会合に常に列席することを許され、また 4 度にわたりイスタンブルを訪れた。ここで取り上げられる史書には、1603 (1012) 年から 1643 (1053) 年にかけてのダマスクスとイスタンブルでの出来事が書き記されている。スルタンの治世に従って配列された年代記の体裁をあくまでとっているが、内容は主に著者自身の見聞であり、自伝的な特色を持っている。そのため Weintritt は、これを「私的歴史叙述 Personal Historiography」の書と定義する。同書のこのような性格は、ダマスクスと首都イスタンブルの地理的な近さ、および 'Abdalqādir の高官との近さに起因すると考えられる。さらに同書の特徴としては、韻文の含まれていないことが挙げられる。それは、おそらく 'Abdalqādir が韻文に関する正式な教育を受けなかったか、馴染みがなかったから、またカーディリーヤ教団の長として弟子や支持者たちに自身とオスマン朝高官たちとの経験を伝えることが目的だったからではなかったかという。

5) このことから Veselý は、taqrīz が 14 世紀末に新しく生まれた文学形式ではなかったかと推測しているが、すぐ後に触れる Rašīdaddīn の集めた taqrīz は 14 世紀初頭のものであり、この点については修正が必要であろう。

Weintritt はマムルーク朝期の史書について触れないが、例えば、Ibn Ḥaḡar al-‘Asqalānī: *Inbā’ al-ḡumr* は著者の生年から始められる年代記であるし、Ibn Taḡrībīrdī: *an-Nuḡūm az-zāhira* など随所に著者の見聞が挿入されているものは少なくない。‘Abdalqādir の史書がどの程度ユニークであるかについては、これら他書とのさらに広範な比較を行って検討を進める必要があるだろう。

⑭ Lutz Wiederhold: *Some Remarks on Mālikī Judges in Mamluk Egypt and Syria* [403–413] は、マムルーク朝期のマーリク派について論じる。周知の通りマムルーク朝治下では4法学派のそれぞれから大カーディー (qāḍī l-quḍāṭ) が任命されたが、ハナフィー派が次第にその勢力を増大させたとはいえ、依然シャーフィイー派が優位を保ち続けた。したがって例えば、13世紀ダマスクスのウラマーを研究した Louis Pouzet は、マーリク派は司法行政や教育の分野でシャーフィイー派やハナフィー派に比肩し得る影響力を持つことはなかったと言う。このような見解に対して、Wiederhold は、年代記の記述からマーリク派カーディーに提出された案件を紹介し、マーリク派が一定の役割を果たしていたと述べる。取り上げられる事例は4つであるが、そこではいずれも宗教的罪(預言者の冒瀆や不信心など)が裁かれ、マーリク派カーディーたちはみな死刑を宣告している。このことから、そのような罪に対して最も厳しい罰が求められる場合に、マーリク派カーディーに案件が回されたと推測される。それは、マーリク派が厳格であったからというよりも、他の法学派が優勢な中であって彼らが司法権の一部を確保しようとする戦略によるものだった。

ある法学派が他派と意見を差異化することによって存在感を示そうとしていたのではないかとの指摘は興味深いが、いかんせん事例が少ない。また、その4つの事例のうち3つがカイロで審理された問題である。エジプトではマーリク派が、シリアではハンバル派がそれぞれ比較的有力であったことを考えれば、地域差についても考慮されるべきだったと思われる。さらに、理論的側面への影響を検討することも課題として残されている。

以上、扱われているテーマはさまざまであり、今後の研究課題を示唆するものが多い。読者各人の関心に従って選読されれば、評者が思いつくままに上述したものほかに、さらに新たな問題を発見できると思う。この紹介が本書を手にとるきっかけともなれば幸いである。

全体としては、誤記の多さが気になった。その大半はもう少し注意深く校正されていれば防げたはずのタイプミスであるが、引用するような場合には一度他の文献で確認すべきである。

なお、本書に寄稿された論文の多くは、2001年3月にドイツのバンベルク大学で開催された第28回ドイツ・オリエント研究者大会(Deutscher Orientalistentag)中、Haarmann 追悼のために設けられた部会での口頭発表がもとになっている。評者は同部会を傍聴したが、そのときのすべての発表が本書に収録されているわけではない。さらに、この部会以外でも

マムルーク朝に関する報告がいくつか行われていた。それらもまた早く公刊されることを期待したい。

[付記] 小稿の校正中に Lecian Reinfandt: *Mamlukische Sultansstiftungen des 9./15. Jahrhunderts*, Berlin, 2003 を入手した。その中で Reinfandt は, “rāwiya” に, 水を入れる「革袋 Schlauch」という訳語をあてている。④ 論文で「升」と訳されている語は, やはり “rāwiya” と読まれたようである。なお, ワクフ文書全文の校訂とそのドイツ語訳を含むこの研究書は, 高く評価されるべきであろう。

参 考 文 献

- Abū Ġāzī, ‘Imād Badraddīn (2000) Manāzil al-umarā’ fi awāḥir ‘aṣr al-mamālīk al-ġarākisa fi ḍau’ waṭā’iq al-Ašraf Ṭūmān Bāy, *Annales Islamologiques* 34, 1 – 21 ar.
- Amīn, Muḥammad Muḥammad (ed.) (1986) Ibn Ḥabīb: *Taḍkirat an-nabīh fi aiyām al-Maṣū’ūr wa-banīh*, vol. 3, al-Qāhira.
- Berkey, Jonathan (1992) *The Transmission of Knowledge in Medieval Cairo*, Princeton.
- Conermann, Stephan & Suad Saghbini (2002) *Awlād al-Nās* as Founders of Pious Endowments: The *Waqfiyah* of Yaḥyá ibn Ṭūġān al-Ḥasanī of the Year 870/ 1465, *Mamluk Studies Review* 6, 21 – 50.
- al-Droubi, Samir (1992) *A Critical Edition and Study on Ibn Faḍl Allāh’s Manual of Secretaryship “al-Ta’rif bi’l-Muṣṭalaḥ al-Sharīf”*, 2 vols., al-Karak.
- van Ess, Josef (1981) *Der Wesir und seine Gelehrten*, Wiesbaden.
- Haarmann, Ulrich (1971) Auflösung und Bewahrung der klassischen Formen arabischer Geschichtsschreibung in der Zeit der Mamluken, *ZDMG* 121, 46 – 60.
- Ḥabaṣī, Ḥasan (ed.) (1994) aṣ-Ṣairafī: *Nuzhat an-nufūs wal-abdān fi tawārīḥ az-zamān*, vol. 4, al-Qāhira.
- Ḥabaṣī, Ḥasan (ed.) (1998) Ibn Ḥaġar al-‘Asqalānī: *Inbā’ al-ġumr bi-anbā’ al-‘umr*, vol. 4, al-Qāhira.
- Halm, Heinz (1979 – 82) *Ägypten nach den mamlukischen Lebensregistern*, 2 vols., Wiesbaden.
- 羽田 正 (2000) 三つの「イスラーム国家」, 『岩波講座世界歴史 14 イスラーム・環インド洋世界 16 – 18 世紀』, 岩波書店, 3 – 90.
- al-Ḥarīthy, Howayda N. (2001) *The Waqf Document of Sultan al-Nāṣir Ḥasan b. Muḥammad b. Qalāwūn for His Complex in al-Rumaila*, Beirut/Berlin.
- Herzog, Thomas (2003) The First Layer of the *Sīrat Baybars*: Popular Romance and Political Propaganda, *Mamlūk Studies Review* 7, 137 – 148.
- Ismā’īl, Muḥammad Ḥusāmaddīn (1998) Munša’āt as-sulṭān Qā’itbāy bi-Sūq al-ġanam min ḥilāl waṭīqa ‘uṭmāniya, *Annales Islamologiques* 32, 41 – 64 ar.

- 岩武昭男 (1994) ラシードゥッディーンの著作活動に関する近年の研究動向, 『西南アジア研究』 40, 55-72.
- Martel-Thoumian, Bernadette (1991) *Les civils et l'administration dans l'état militaire mamlūk (IX^e/XV^e siècle)*, Damas.
- Petry, Carl F. (1981) *The Civilian Elite of Cairo in the Later Middle Ages*, Princeton.
- Rosenthal, Franz (1981) "Blurbs" (*Taqiḏ*) from Fourteenth-Century Egypt, *Oriens* 27-28, 177-196.
- Sayyid, Ayman Fu'ād (ed.) (2002) *al-Maqrīzī: al-Mawā'iz wal-i'tibār fī ḏikr al-ḥiṭaṭ wal-āṭār*, London.
- 清水和裕 (1990) 9世紀アッバース朝のアトラークと奴隸軍人, 『史学雑誌』 99-6, 1-37.
- 清水和裕 (1999) マムルークとグラーム, 『岩波講座世界歴史 10 イスラーム世界の発展 7-10世紀』, 岩波書店, 223-245.
- Tawā, Fādī Ilyās (1998) *al-Munāḥ wal-as'ār wal-amrād fī bilād as-Šām fī 'ahd al-mamālik (648-922/1250-1516)*, Bairūt.
- Weintritt, Otfried (1992) *Formen spätmittelalterlicher islamischer Geschichtsdarstellung*, Beirut.

(京都大学大学院文学研究科)